

〔病虫害の発生概況〕

〔病害発生概況〕

冷夏・長雨の異常気象の影響を受けて病害が多発生した。主なものをあげるとイネいもち病・白葉枯病、ジャガイモ疫病、果菜類の斑点細菌病・疫病・べと病、葉菜類の黒腐病・軟腐病・べと病など、カンキツかいよう病・黒点病など、ナシ黒斑病・黒星病、カキ炭そ病、ブドウべと病、茶炭そ病である。なおイネラギッドスタント病及びシュンギグべと病の新発生があった。

稲・麦

早期水稲で葉いもち・穂いもち（鹿児島本土を除く）が発生し、長崎の山間・島しょで多発生した。普通期水稲では苗いもちは少発生であったが、葉いもちは6月下旬から山間部を中心に各地で多発生し、引続いて穂いもちも多発生となり、近年にない大被害であった。発生は穂肥の効いたところ、野菜の跡作で特に多かった。白葉枯病は7月及び8月の集中雨による浸冠水で広範囲に感染が起り、9月中旬の台風13号によってさらにまん延し、熊本・佐賀・福岡の平坦地で多発生となった。黄化萎縮病が福岡などで発生が目立った。紋枯病は全般的に少～並発生であり、粗枯細菌病も一部を除いて少発生であった。縮葉枯病の発生増が宮崎・鹿児島などでみられ、萎縮病は依然として広域に発生が続いている。わい化病は鹿児島・福岡で少面積ながら発生が目立った。グラッシースタント病は前年より少発生ながら九州全域にみられ、ラギッドスタント病が極少発生ながら鹿児島・長崎で発生があった。沖縄でみられていたトランジトリーイエローイング病が鹿児島県徳之島に発生が確認された。

ムギ赤かび病の発生は早かったが進展は少なく、少発生にとどまった。コムギ赤さび病が熊本・大分で、小さび病が長崎・大分で、うどんこ病が大分でそれぞれ多目の発生であったが、ほかは並～少発生であった。オオムギ縮萎縮病が佐賀・福岡・熊本などで発生が増加した。株腐病が大分の一部で二条大麦に多発生した。斑葉病、雲形病の発生もみられた。

転作物

ダイズ紫斑病の多発生が懸念されたが、秋の好天で少発生に終わった。べと病が長崎・熊本・大分などで多目の発生となり、モザイク病は宮崎・熊本などでかなりの発生がみられている。葉焼病が熊本・鹿児島で多目の発生、さび病が長崎で広く発生した。宮崎の排水不良地で茎疫病、鹿児島で葉腐病の発生が目立った。なお、宮崎のト

ウモロコシの一部で黄化萎縮病の発生があった。

野菜

トマト疫病が露地栽培で全般的に多発生し、斑点細菌病・かいよう病・青枯病・軟腐病などの細菌性病害が各地で多発生した。ナス灰色かび病・菌核病が施設栽培で発生が多く、縮疫病・褐紋病・褐色腐敗病などが露地栽培で多発生した。ピーマン疫病・斑点細菌病が多発生し、宮崎では TMV-トウガラシ系が県内各地に拡がり発生程度も高くなっている。キュウリべと病・斑点細菌病・褐斑病・つる枯病などが多発生し、このほか施設栽培で菌核病、露地で疫病が多発生した。スイカ炭そ病・つる枯病・疫病が多発生した。9、10月の台風によるほ場の浸冠水あるいは排水不良でカボチャ疫病が宮崎・鹿児島・沖縄で多発生した。冬季の温暖多雨の影響を受けてクマネギ白色疫病が早期から発生し、多発となった。イチゴ灰色かび病が各地で多発生した。ハクサイ軟腐病・白斑病、キャベツ黒腐病・菌核病・軟腐病が多発生した。レタス腐敗病・軟腐病・菌核病が高原の産地で激発した。ジャガイモ疫病・青枯病が長崎の秋作で多発生した。サツマイモ塊根異常症状が各地で発生し、商品価値の低下で問題になっている。シュンギグべと病（侵入病害、昨年広島で初発生）が福岡・長崎（佐世保）で多発生し、注意を要する。なお、鹿児島でソラマメさび病、沖縄でインゲン菌核病・根腐病の発生が増加している。

果樹・茶・特用作物

カンキツかいよう病は6月中旬の強風雨のため果実の感染が激しく、さらに7～8月の長雨により九州全域で多発生した。同様に黒点病が例年にない多発生となり、そうか病は鹿児島を除いて発生が増加した。ナシ黒斑病・黒星病・赤星病が福岡・佐賀で多発生し、特に前二者は薬剤耐性菌の発生が各地でみられた。カキ炭そ病が福岡で例年にない多発生となった。ブドウべと病（福岡）・褐斑病（福岡・佐賀）・黒とう病（福岡・佐賀・大分）が多発生し、赤熟れ現象が各産地で問題になってきた。クリ炭そ病が熊本・宮崎で多発生した。パイナップル萎ちょう病の発生が古株園の一部で目立ってきた。茶炭そ病が中山間部で局地的に激発し、もち病が山間部の一部で多発生した。サトウキビ葉焼病・葉枯病は初め増加傾向であったが、5月中旬以降の日照りで発生が抑えられた。

（九州農業試験場 環境第一部）

〔害虫発生概況〕

中部及び北部九州における夏季の低温・多雨・少照の異常気象下で、水稻害虫ではセジロウカとコブノメイガが異常多発したが、他の水稻害虫及び農作物では全般的に発生は少なかった。九州本土とは対照的に、南西諸島は異常かんばつで、5～8月サトウキビにバッタ類が広く多発した。野菜類ではスリップスの1種が新発生害虫として同定され、佐賀・沖縄両県を除く九州地域へ広く発生分布が拡大し、大きな問題となっている。

水稻・いぐさ・麦

水稻ではセジロウカとコブノメイガが全域に異常多発した。両虫はトビロウカとともに海外から飛来する。本年の初飛来は、南部及び西部では5月15日、中部及び北部でも5月25日で、平年に比べ非常に早かった。その後は各地で断続的に数波が飛来し、梅雨明け後も梅雨型の天候が長く続いたので、7月末まで飛来があった。すなわち、本年は異常気象により飛来期間は非常に長く、飛来波数も多く、セジロウカとコブノメイガの飛来量は異常に多かった。本田においてセジロウカは8月中旬に終息したが、コブノメイガは飛来成虫が産出した第2世代（7月）及び第3世代（8月）に被害が多発した。7～8月は連日にわたる降雨のため適期防除が困難で、必然的に防除回数は多くなり、稲は軟弱に生育したため幼虫の歩留りは良好で、被害が助長した。しかし、例年

多発する第4世代（9月）の発生は意外に少なかった。これは夏期の低温により幼虫の発育が遅延し、第4回成虫の発生が9月10日以降にずれ、交尾が正常に行われなかったものようである。九州における発生面積率（普通期）は、セジロウカ75%、コブノメイガ78%であった。

トビロウカの飛来量は、南九州では平年に比べやや多目、その他の地方では少目で、異常気象により増殖が抑制され、さらにコブノメイガ防除により併殺されて、被害は南九州でも軽微であった。以上のほか、鹿児島県の一部では本田中・後期にツマグロヨコバイが異常多発したところがあり、また南九州の早期稲ではカメムシ類の発生が多かったが、防除が適切で斑点米の発生は少なかった。

麦では北九州で昨年と同様にトビムシモドキが多発し、発芽直後の新芽・新根の食害による被害が発生した。いぐさではイゲサシムシガの発生は平年の1/5程度であった。

転換畑作物

大豆・飼料作物とも全般的に害虫の発生は少なかった。熊本・宮崎両県の中・山間部ではダイズサヤマバエが多発した。また、鹿児島県の一部では8月下旬ソルゴーでアワヨトウが異常多発したところがあった。

野菜・畑作物

53年11月宮崎県で発見されたスリップスの1種は、そ

昭和55年水稻主要病害虫の発生状況（発生面積ha）

病虫害名	福岡	佐賀	長崎	熊本	大分	宮崎*	鹿児島*	沖縄*
(病害)								
業いもち	26,007	18,988	12,100	24,530	29,344	23,546	17,068	175
徳梗いもち	46,002	11,755	16,000	22,141	33,424	26,635	15,572	27
紋枯病	20,700	7,356	12,000	24,514	31,103	29,516	29,363	288
白葉枯病	9,262	9,904	1,700	19,983	5,082	8,641	1,896	199
稈枯細菌病	869	1,850	1,300	2,500	3,280	1,193	6,375	—
縞葉枯病	8,107	41	500	100	1,485	2,415	2,877	—
萎縮病	19,713	986	10,000	12,590	11,891	11,625	11,082	—
黄萎病	0	1	50	10	0	608	319	2
ごま葉枯病	6,788	5,055	8,000	3,370	10,987	5,115	12,285	265
小粒菌核病	—	41	—	4,000	4,174	—	1,145	0
心枯緑虫病	118	—	3,000	1,200	3,859	2,258	—	24
(虫害)								
ニカメイチュウ(第1世代)	158	—	80	—	3,132	}1,467	1,001	} 3
(第2世代)	112	—	80	—	1,655		851	
セジロウカ	59,280	20,879	23,000	31,000	29,733	31,800	31,077	86
トビロウカ	41,081	20,879	23,000	24,500	15,085	25,333	20,563	85
ヒメトビウカ	27,928	493	5,000	8,500	5,748	24,904	11,458	81
ツマグロヨコバイ	58,030	36,702	16,000	23,500	29,053	31,800	26,838	369
イネツトムシ	—	493	—	2,000	3,650	4,150	2,635	0
コブノメイガ	62,713	18,783	23,000	31,000	36,909	20,551	33,182	105
フタオビコヤガ	—	—	50	100	1,957	3,540	988	0
アソヨトウ	799	164	500	800	11	1,000	0	1
イネゾウムシ	1,380	2,302	5,000	7,500	6,555	2,327	1,982	—
カメムシ類	3,451	—	14,500	4,800	4,655	19,219	5,633	30

* 早期あるいは一期・二期作を含む。

の後分布地域を拡大し、南九州の施設・露地栽培の果菜類に激甚な被害が生じていた。本種は56年1月 *Trips palmi* KARNY (仮称ケグロキイロアザミウマ) と同定され、新発生害虫であることがわかった。同時に、現在(56.3) 佐賀・沖縄両県を除く各県で発生が確認されている。本虫の防除には有効な登録農薬がなく、防除対策に苦慮している現状であり、今後生理・生態研究と相俟って、適確な防除対策が急がれている。

その他の野菜害虫では、ゴボウのトビイロヒョウタンゾウムシ、1～3月エンドウにハダニ類及びハモグリバエ(鹿児島)、秋期高冷地のダイコンにキスジノミハムシ(宮崎)、イチゴにナミハダニが春季(福岡)及び秋季本ほへ植付後(佐賀)に多かった。

畑作物では、南西諸島の全域に5～8月の乾燥により、サトウキビにセスジツチイナゴが異常多発し、防除が困

難なこともあって被害は大きかった。そのほかサトウキビではトノサマバッタ、メイチュウ類、カンシャクシコメツキの発生も多目であった。

果 樹・茶

異常気象の影響で、とくに夏季に害虫の発生は少なかった。果樹ではミカンで第1世代ヤノネカイガラムシ、カミキリムシ類、ミカンハモグリガなどが、各地で多目の発生であった。また、クリタマバチは各地で増加傾向で、とくに集団新植園での発生が目立っている。カキ及びナシを加害するカメムシ類は、越冬量は多かったが、夏季低温のためスギ・ヒノキの実が良好な状態に保たれたため、秋季果樹への移行は意外に少なかった。茶樹では、秋季にハマキ類、チャノキイロアザミウマ、チャノミドリヒメヨコバイなどが多目であった。

(九州農業試験場 環境第一部)